

部 会 報 告

第 22 回 機電技術者意見交換会報告

建設業部会 機電技術者交流企画 WG

1. はじめに

当協会の業種別部会に属する建設業部会（建設業 54 社の会員会社で構成）は、会員相互の共通課題をテーマに取り上げ、事業活動を行っている。

これまで、時代の要求や業界の状況を反映し、様々な事業活動が実施されてきたが、特に建設の生産性向上と品質確保および環境保全といった業界普遍のテーマに取り組むための『人づくり』『場づくり』の企画は当部会の大きな柱となっている。

機電技術者意見交換会は、平成 9 年より昨年まで 21 回開催されてきているが、第 16 回（平成 24 年）からは、当部会の中に「機電技術者交流企画 WG」を設置し、開催意義を再検討するとともに、機電技術者のさらなる育成交流に資する活動として、討議テーマ、グループ編成、講演内容および PR 活動等の検討を行っている。

今年度は第 22 回目となり、昨年の反省を踏まえるとともに、新たな取組を盛り込み、開催された。（※詳細報告は協会ホームページ内：建設業部会の中に過去分を含め、報告書として掲載されているので確認していただきたい。）

2. 第 22 回機電技術者意見交換会

(1) 概要

①機電技術者意見交換会参加者の選出基準

30～40 歳前後の機電技術者（グループ会社も含む）

②開催日時

平成 30 年 10 月 15 日（月）～ 16 日（火）

③場 所

国立オリンピック記念青少年総合センター

④討議テーマ

「機電技術者は AI とどう付き合っていくべきか」

⑤講演

演題：『衛星通信技術

～準天頂衛星（みちびき）の今～』

講師：三菱電機㈱ 電子システム事業本部

高精度測位事業推進部

測位ソリューショングループ担当部長

：榎本直人 様

⑥スケジュール

1 日目（10 月 15 日）

10:30 ～ 11:00 参加者受付

11:00 ～ 11:30 オリエンテーション

12:30 ～ 13:45 自己紹介（自己アピール PPT）

14:00 ～ 15:30 グループ討議（班編成：工種）

15:30 ～ 17:00 グループ討議（班編成：平均年齢）

17:30 ～ 懇親会

2 日目（10 月 16 日）

8:30 ～ 9:30 グループ討議（班編成：同世代）

9:30 ～ 12:00 グループ討議（班編成：工種）

討議成果のまとめおよび発表準備

13:10 ～ 15:15 グループ討議成果発表会

15:30 ～ 16:15 講演

16:15 ～ 17:00 講評

17:00 閉会

(2) 参加者および班編成

参加者はゼネコン、海洋系、道路系、会員のグループ会社から 25 社 25 名であった。

班編成は、一昨年から実施している班編成メンバーを 2 回入れ替えるシャッフル方式が好評であったことから、それを継続実行した。工種別を基本班として、1 日目は平均年齢が各班同一となるような構成、2 日目は年齢が同世代となるような構成にシャッフルした。なお、いずれも工種が重ならないように配慮した。基本班の班編成を表 1 に示す。

表 1 班編成（基本班）

班編成		人数	平均年齢
1 班	海洋・土木系	5	29
2 班	道路・土木系	5	33
3 班	土木系	5	30
4 班	土木・開発系	5	32
5 班	土木・開発系	5	32

(3) グループ討議および成果発表

「機電技術者はAIとどう付き合っていくべきか」という討議テーマのもとに、前述の班編成で討議を行った（写真—1）。

各班ともこれからの技術であるAIって何だろうから始まり、共通の認識をはぐくむ事に苦慮しながらも機電技術者として討議を進めた。各班の成果発表シー

トを図—1～5に示す。

成果発表は、班メンバーが壇上に整列した後、代表者から成果を発表する方法で進めた。その後、3年前から実施している参加者全員が発言するという機電技術者交流企画WGの基本方針に基づき、参加者一人ひとりに討議内容および意見交換会へ参加した感想等について発表してもらう時間を設けた（写真—2）。



写真—1 グループ討議



写真—2 成果発表

第22回機電技術者意見交換会

テーマ
「機電技術者はAIとどう付き合っていくべきか」

成果発表 【第1班】

平成30年10月15日(月)～16日(火)
場所: (独)オリンピック記念青少年総合センター
主催: (一社)日本建設機械施工協会 建設業部会

第1班 討議メンバー

No	氏名	所属会社	所属部署
1	亀井 聡	オリエンタル白石機	本社 技術本部 技術部 機電チーム
2	横渡 和朗	五洋建設機	土木本部 船舶機械部
3	上原 弓張	大成建設機	技術センター先進技術開発部 建設技術開発室
4	都甲 肇	東洋建設機	北陸支店工事部 新潟海岸作業所
5	宮本 康郎	東亜建設工業機	土木事業本部 機電部 電気グループ

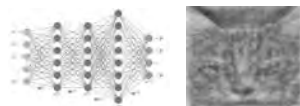
氾濫するAIの定義

- ・ 広義
—「人間にしかできなかった知的行為ができる機械」



氾濫するAIの定義

- ・ 今着目されているAI
— 多くのデータから特徴を自分で学習し、分類や判断をする機械学習手法。



- ・ これが我々が身近で付き合うであろうAIのレベル

これから現場に導入されるであろうAI

- ・ 設備の保守関連
— 故障診断・異常検知・予知保全システム



これから現場に導入されるであろうAI

- ・ 安全関連
— ヒトの画像認識による自動停止システム
— 環境計測により作業可否を判断するシステム



それらのAIとどう付き合うか

- ・ AIは本当に正しいのか？
— 学習データの管理は機電の仕事！
— AIの出力の妥当性評価は機電の仕事！
- ・ そのAI、本当に現場に適している？
— 運用方法、適用条件などの管理は機電の仕事！

結論

- ・ 「機電技術者はAIとどう付き合うのか」
— 「機電 VS AI」という構図...
- ではなく、
— 今はまだ機電技術者がAIを育てる段階
- 現場に適したAIを選び、育て、検証するのが
我々の仕事

図—1 成果発表【第1班】

第22回機電技術者意見交換会

テーマ：
「機電技術者はAIとどう付き合っていくべきか」

成果発表 【第2班】

平成30年10月15日(月)～16日(火)
場所：(独)オリンピック記念青少年総合センター
主催：(一社)日本建設機械施工協会 建設業部会

第2班 討議メンバー

No	氏名	所属会社	所属部署
6	若本 大敬	(株)MECX	福岡営業所
7	野田 哲也	鹿島道路(株)	機械部 開発設計課
8	三沢 俊平	大成ロテック(株)	生産技術本部 機械部 機械センター
9	細見 耕平	大林道路(株)	本店機械部機械センター
10	稲生 晃博	世紀東急工業(株)	事業推進本部 機材・購買部 機械センター

道路舗装工事におけるAIの活用状況

AI活用状況・・・なし

道路舗装工事での技術

ICT情報化施工

- ・コンクリート機械の高さ軌跡制御
- ・モータグレーダ、アスファルトフィニッシャの高さ制御
- ・転圧作業に用いるローラの自律走行
- ・地上型レーザースキャンを用いた出来形管理 ほか

道路舗装工事に求めるAI技術

- ・舗装工事における舗装機械の全自動化
- ・材料運行情路管理による施工での品質管理の向上
- ・機械の自己診断ができ修理箇所の特定
- ・情報化施工機器の出庫管理を行い省力化
- ・アスファルト合材製造所の無人出荷

現状考えられる問題点

- ・ICT情報化施工のデータ作成入力は人力によるものであるかつ、現場との整合性が取れない場合がある
- ・機械が故障してから修繕をするため生産性の低下及び時間のロスにつながる
- ・施工終了時の人力作業に時間がかかることによる時間ロスで品質低下につながる

今後考えられる問題点

- ・AIの施工トラブル時の対応能力
- ・機械の自動化にはメーカーの協力が必要
- ・人力作業への対応

機電技術者として取り組むこと

AI普及にむけて機電技術者のスキルアップ及び若手社員への教育、指導を行う

導入方法を模索し、情報化施工をはじめとする既存技術との併用でさらなる生産性向上、品質確保を目指す

まとめ

生産性向上、品質確保、安全を確保するための機電技術者の一つのツールとして必要なデータ収集を行いAIを活用していく

図ー2 成果発表【第2班】

第22回機電技術者意見交換会

テーマ：
「機電技術者はAIとどう付き合っていくべきか」

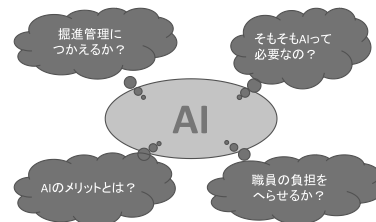
成果発表 【第3班】

平成30年10月15日(月)～16日(火)
場所：(独)オリンピック記念青少年総合センター
主催：(一社)日本建設機械施工協会 建設業部会

第3班 討議メンバー

No	氏名	所属会社	所属部署
	古谷 駿	機熊谷組	北陸新幹線
	大林 信彦	鹿島建設機	技術3グループ
	斎藤 洋平	機安藤・間	品川出張所
	河合 正義	東急建設機	本社 機械技術部
	猪原 慶史	機大林組	本社 機電

このテーマに向かってこんなことをはなしました・・・



AIのできること

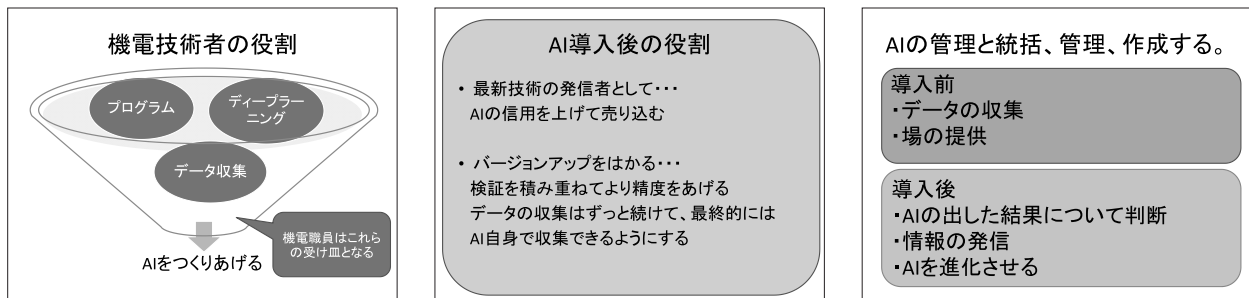
- ・ICT技術を組み合わせることでさらに職員の負担を減らす。
- ・機械の故障を察知させる。
- ・機械の異常の見落としを減らす。

機電技術者がやること

- ・AIを使用する場の提供
シールドの掘進管理
山岳トンネルでの切羽の予測
- ・データの収集
機械の負荷データ
我々が不必要だと思われるデータなど
- ・結果の確認と判断

AIの構築の難しさ

- ・データ収集
感覚だった部分について、数値化する
出てきたデータの処理
- ・ディープラーニング
機電屋の専門外
- ・プログラムの構築
機電屋の専門外



図－3 成果発表【第3班】

第22回機電技術者意見交換会

テーマ：『機電技術者はAIとどう付き合っていくべきか？』

成果発表 【第4班】

平成30年10月15日（月）～16日（火）
場所：（独）オリンピック記念青少年総合センター
主催：（一社）日本建設機械施工協会 建設業部会

第4班 討議メンバー

班員	氏名	所属会社	所属部署
1.5	伊藤 和彦	清水建設（株）	土木技術本部 開発機械部
1.7	萩原 良平	森田建設（株）	東京支店
1.8	渡辺 哲也	西松建設（株）	西日本支社 中部支店 横浜トナレ川出張所
1.9	林 拓歩	（株）奥村組	東日本支社 機械部 技術課
2.0	西岡 真	三井住友建設（株）	東京土木支店 谷山トンネル作業所

▶ AIってなに？

- AIで仕事が減るの？
- AIは誰でも使えるの？
- AIで何が出来るの？
- AIはもう使われているの？
- AIは間違えないの？
- AIはどうやって作るの？
- AIと人は共存できるの？

➡ どのようにAIを活用するか未確定

建設分野においてAIをどう活用するか

▶ AIを活用するまで

- ①データ収集について
- ②データの活用について
- ③改善について
- ④AIの応用について

まとめ

▶ ①データ収集について

- 過去の実績を引き出しデータ化する
- 現在進行形のデータはそのまま蓄積していく
- 地質データの収集

▶ ②データの活用について

- 地質データをもとに工法の選定
- 施工前に工事終了までのシミュレーションをさせる
- 予想されるトラブルをあげる

▶ ③改善について

- (1)施工前
シミュレーションの改善
→費用対効果、安全性、問題がないか
人判断する
- (2)施工中 施工後
想定外地質、予期せぬトラブル
→最適な方法に更新

▶ ④AIの応用について

- 違う環境でも活用できるように
→海洋開発、宇宙開発？
- 他分野への応用
→地震予測等他分野への参入（地質データの収集から）
温泉・地熱利用などの活用

▶ まとめ

- 導入するまでの基盤は機電技術者が先頭に立って行っていく。
- 施工計画に費やす時間の短縮
→ワークライフバランスの改善
- 技術の継承、過去の技術の見直し、新技術発見→技術提案

図－4 成果発表【第4班】

テンプレート 第22回機電技術者意見交換会 テーマ： 「機電技術者はAIとどう付き合っていくべきか」 成果発表 【第5班】 平成30年10月15日（月）～16日（火） 場所：（独）オリンピック記念青少年総合センター 主催：（一社）日本建設機械施工協会 建設業部会	第5班 討議メンバー <table border="1"> <thead> <tr> <th>No</th> <th>氏名</th> <th>所属会社</th> <th>所属部署</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>上野 剛</td> <td>(株)通池組</td> <td>東京外かく環状道路本線トンネル(南行)</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>曲谷 純一</td> <td>大豊建設(株)</td> <td>東京土木支店</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>香川 久樹</td> <td>(株)竹中工務店</td> <td>東日本機材センター</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>今藤 基希</td> <td>佐藤工業(株)</td> <td>機電課</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>山本 昂輝</td> <td>前田建設工業(株)</td> <td>北海道新幹線、内通トンネル</td> </tr> </tbody> </table>	No	氏名	所属会社	所属部署	1	上野 剛	(株)通池組	東京外かく環状道路本線トンネル(南行)	2	曲谷 純一	大豊建設(株)	東京土木支店	3	香川 久樹	(株)竹中工務店	東日本機材センター	4	今藤 基希	佐藤工業(株)	機電課	5	山本 昂輝	前田建設工業(株)	北海道新幹線、内通トンネル	機電技術者はAIとどう付き合っていくべきか 漠然とした御題に対して切り口を見出すために…… そもそも我々機電技術者がAIに抱く期待とは？ 我々の代わりに現場内の情報を収集し、こちらの判断材料を提示してくれるのではないか ※たとえば、施工機械の不具合等をAIに判断させて、職員が確認する時間の短縮を図る等
No	氏名	所属会社	所属部署																							
1	上野 剛	(株)通池組	東京外かく環状道路本線トンネル(南行)																							
2	曲谷 純一	大豊建設(株)	東京土木支店																							
3	香川 久樹	(株)竹中工務店	東日本機材センター																							
4	今藤 基希	佐藤工業(株)	機電課																							
5	山本 昂輝	前田建設工業(株)	北海道新幹線、内通トンネル																							
(ここで疑問が……)そもそもAIとは？ 「言語の理解や推論、問題解決、創造などの知的行動を人間にかわってコンピューターに行わせる技術」 ウィキペディア先生より →ICT施工の延長のようなものという漠然としたとらえ方をしている節もあるように思われるが、AI分野を研究している人たちの最終目標は、おそらく人間の脳を使って行われることの完全な置き換えにあるのではない。業界の差で、考え方にかなりのギャップがあるのではない。	先のギャップから来る、我々がAIに抱く不安とは ・判断を委ねすぎることにより、機電技術者としての能力が低下していくのではない。 ・AIのエラー(今の我々には想像もつかないようなもの)に対する対応を迫られた場合の不安 ・現在行っている機電技術者の業務がAIに置き換えられてしまうのではない。 ・AIが判断を行ったことにたいする実行が人間による作業の主体となり、人間がAIの考えを実行するツールになってしまうのではない。 →期待よりも不安のほうが多い	(一度整理) では、我々がAIを導入する目標(ゴール)はどこにあるのか。 5班の目標としては…… →建設業界に対してAIの導入段階の時期にあるため、目下のところはAIが人間の業務(判断)を補助するツールとして普及させることを一つの目標とする所から始める。																								
我々機電技術者が、この段階において担うべき役割 →完成されたAIが導入されるわけではなく、AIに学習させるところからスタートすることが予想されるので、AIに対する教育業務が中心になるのではない。 →たとえばBHにAIを搭載するとして、それに特化したものか汎用性を持たせる前提のものかを意識した学習のさせ方によって今後の弊がりに差が出ると思われる。 ※BHの操作とそれにかかわる異常の拾い出しに特化したものなのか、整地や造成作業の一部とみなして、他の施工機械にもすぐさま転用の利くもの(AIに操作方法を学習させればすぐに使える)といったように、学習させる側の意識や目的の差で結果が大きくかわってくる可能性がある。	これより我々が、AIとはそもそも学習し、自己で考える力を持ち、その先も広がる可能性を持つものとして認識し、学習させていく自らの意識付けが必要になる →つまり、AIとの付き合い方としては、導入段階においてはある意味、先輩後輩、または教師と生徒のような関係になると予想される。 そして学習を終えて、自立したAIとして動き始めた時は現状の設備を維持管理する業務がAIを搭載したなにかの維持管理業務が主体となりえる。 大きな変化に見えて、職人や後身に対する教育がAIに代わり、機械設備等の維持管理がAIに対する維持管理に移行すると考えると、現行からの置き換えととらえることもできる。	この討議結果の上では、先に出たAIに対する不安は未知のものに対するごく当然の不安である。 したがって、人間と同様にAIをよく知ることを前提とした付き合い方が必要であり、理解を深めていくことが重要である。																								

図—5 成果発表【第5班】

(4) 講評

成果発表後、各社の上司の方々から全体を通した講評を頂いたので、抜粋を以下に示す。

- ・どの班も起承転結がしっかりしたすばらしい発表であった。
- ・AIについては漠然とした感じも受けますが、電気や機械のない現場はありえませんか、漠然としているからこそ明確にしていくのが機電技術者の職務ではないでしょうか。
- ・AIを討議して不安を感じる方もいらっしゃるようですが、何も無いところから形を作っていくことこそ我々機電技術者の職務と考えている。
- ・2日間でよくまとめられていると感じる。
- ・AIの導入が、長い間言われ続けている「機電技術者の地位向上」の助けになればと思われる。
- ・AIに判断を任せるのではなく、自ら判断できる機電技術者と成長されることを期待する。
- ・意見交換会に出席して、議論することが皆さんの良い経験になったのではないかと、ここで得たつな

がりを大事にしてもらいたい。

- ・AIの出してきた答えをどのように判断するかが機電技術者としての経験や技量と思われる。
- ・各社の中で機電技術者は数が少ない。しかし技術開発などで機電技術者のウェイトは高まっている、AIに関しても機電技術者が評価を行うようになってもらいたい。
- ・発表にいろいろな見方があり、考えさせられた。
- ・流されない技術を学んでももらいたい。

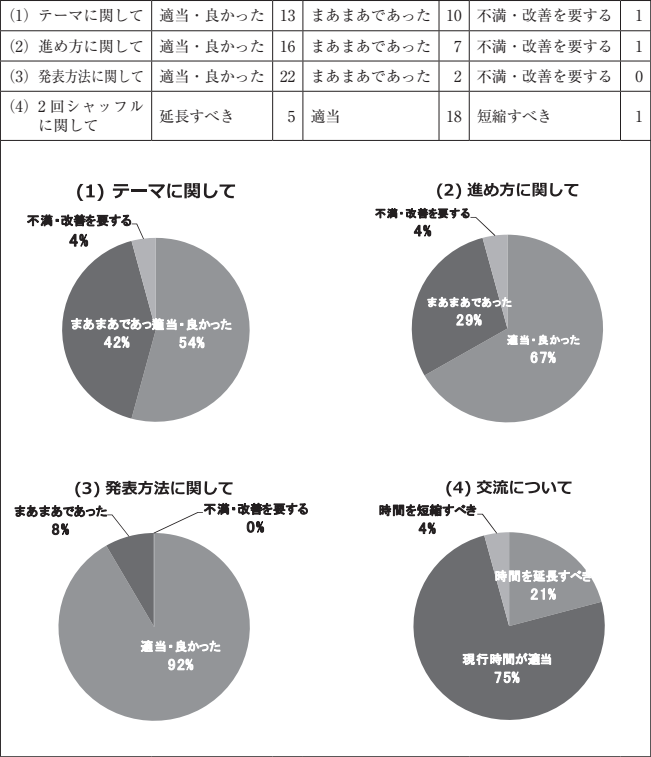
(5) 参加者アンケート解析結果

当部会では、意見交換会の反省や次年度への検討課題の把握等を目的として参加者へのアンケートを毎回実施している。以下に解析結果の概要を示すとともに、集計結果抜粋を表—2～6に示す。

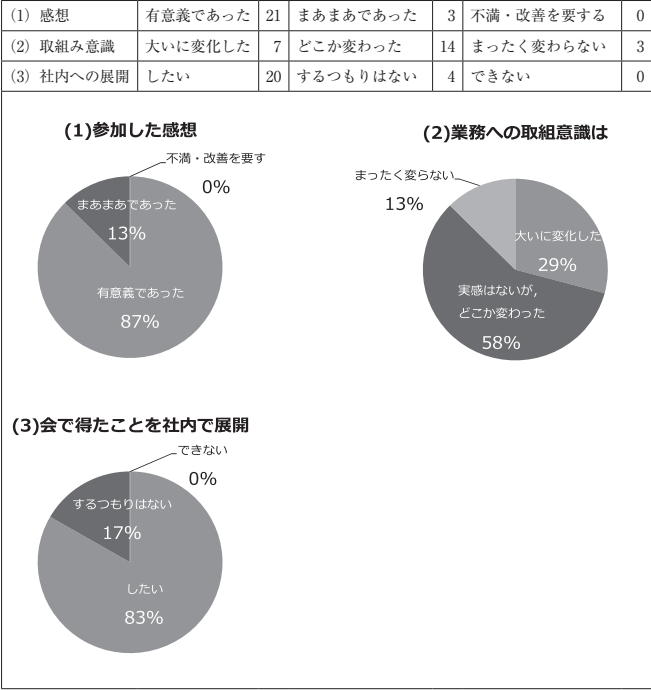
①テーマ、進め方、発表方法、交流について

テーマについては「適当・良かった：54%」「まあまあであった：42%」という回答であり、テーマとしては討議しづらい内容にも関わらず、評価としては肯

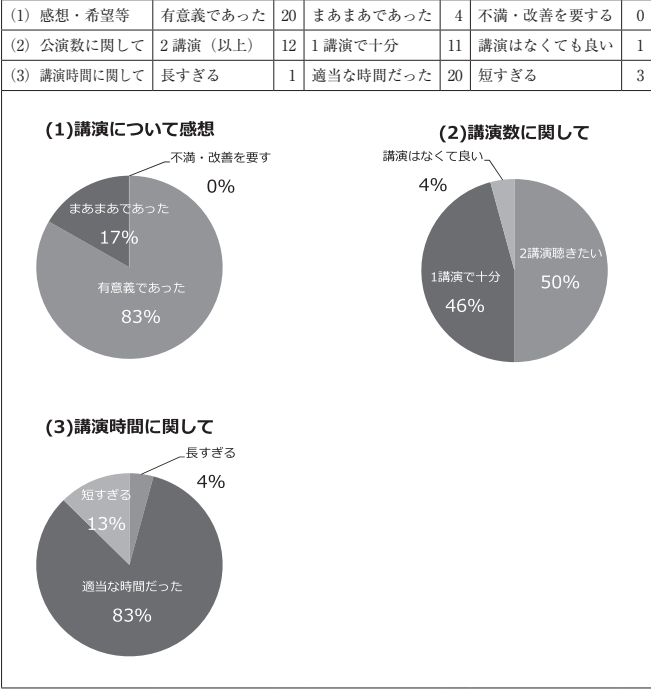
表一 2 テーマ、進め方、発表方法、交流について



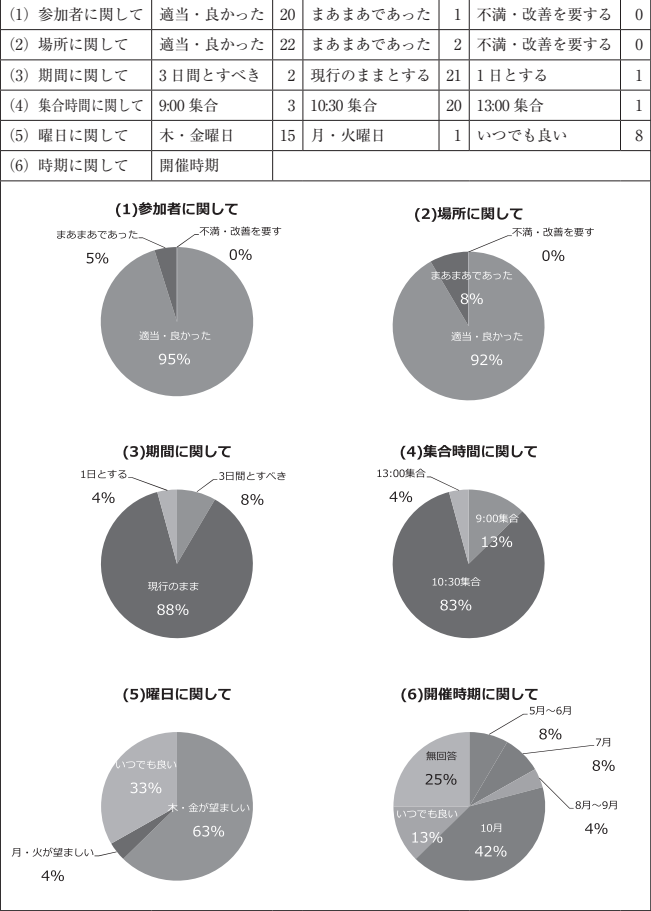
表一 4 参加した感想



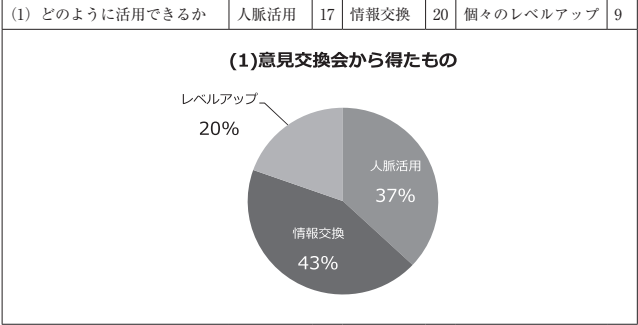
表一 5 講演について



表一 3 参加者、場所、期間、集合時刻について



表一 6 意見交換会から得たもの



定的に捉えられている。アンケートからは、「もう少し絞ったテーマの方が討議しやすい」という意見がある一方、「自分なりにAIを考えるきっかけになった」という意見もあり、二分化の状態である。次年度は複数のテーマ設定等も踏まえ検討していきたい。

シャッフルについては、「多業種の人間と意見交換が出来、有意義であった」「他工種および年代別での討議は新鮮であった」等、好評であり、今後も継続していきたい。

進め方については「不満・改善を要す」という回答が4%あったが、特に大きな問題は無かったと考える。ただ、シャッフル時のパソコン管理方法などに次年度の参考としたい。

発表方法については、昨年度に続いてパワーポイントによる発表を採用したが、討議に影響が出ることは少なかったと思われる。パワーポイントの作成や操作に若干の得手、不得手はあるものの、発表に影響は少ないと考えられる。

本会の主目的でもある機電技術者の交流については、シャッフルの時間について時間延長を希望する意見が多かった。現状、2日間での討議時間6.5時間の内、2.5時間をシャッフルの時間に割り当てているが、配分については来年度の課題としたい。

②参加者、場所、期間について

参加者に関しては「不満・改善を要す」という回答は無かったが、「建機メーカー等の異なる業種の参加を希望」との意見があり、異なる業種の機電技術者の話も聞いてみたい意欲がうかがえる。

場所に関しても「不満・改善を要す」という回答は無かったが、遠方から前泊しての参加者も見受けられたが、多くは当日移動で対応できている。宿泊施設の前泊予約や参加者全員の前泊も今後の検討としたい。

期間、集合時刻については概ね現行とおりで良いという回答であったが、「3日間」「9:00集合」を希望する方も1割程度いることから、時間が短いと感じる参加者も一定数いることがうかがえる。現場見学と併せた長期の研修等も検討すべきかと思われる。

開催時期に関しては、現行の「10月：42%」が多数であるものの、「いつでも良い」「無回答」が38%を占めている。当座は現行通りを継続していくべきと考える。

曜日に関しては「月・火が望ましい：4%」に対し、「木・金が望ましい：63%」と週末を希望する意見が圧倒的に多い。施設予約の関係から今年は「月・火」開催としたが、出来れば週末開催となるように施設予約時に調整したい。

業務上の支障については、ほとんどが事前調整でき、支障はなかったという意見ではあるが、「現場での業務調整が大変であった」という意見もあることから、通知時期の更なる早期化等を検討したい。

③参加した感想

感想欄の回答からは「有意義であった：87%」「まあまあであった：13%」「不満・改善を要す：0%」という回答を得たことから意見交換会は成功と考えたい。

「会で得たことを社内で展開するか」という問いに対しては、昨年度の100%から83%へ減少し、「するつもりはない：17%」を考慮すると、有意義の度合いも年度によりズレがあることがわかる。

業務への取り組み意識も「大いに变化した：29%」「実感は無いが、どこか変わった：58%」であり、今年度のテーマが直近の技術ではなく、将来技術であったことにも起因していると思われる。参加者の意識については、継続して注視していく必要がある。

主な意見として、「他社、他分野、同年代の機電技術者と交流ができ有意義であった」「異なる分野の技術者と意見交換できて刺激を受けた」「参考になった」「よい機会であった」等のポジティブな意見が多数であり、今後も意見交換会を継続する必要があることを再認識した。

④講演について

講演に関しては機電技術者として興味の湧く講演内容であったと考える。時間的にも「適当な時間であった」という方が83%であり、今後も1時間弱の講演時間を確保して進めたい。ただ、2講演を望む方が50%いることから、可能な範囲で時間調整を検討する必要がある。

講演内容に不満の声はなく、最新技術の紹介や他分野の情報を望む声が多いことから、今後も機電技術者が興味を持つ話題を提供したい。

⑤今回の意見交換会から得たもの

今回の経験をどのように活用して行くかという問いに対しては、「人脈活用：37%」「情報交換：43%」「個々のレベルアップ20%」という回答を得ており、各人それぞれ刺激を受け、良い経験となったようだ。

その他の意見としても「今後も交流していきたい」「他社の現状を知る良い機械であった」「今回話をした内容を自社に持ち帰り、今後役に立てられるよう展開したい」等の意見があり、精神的にも有意義な場を提供できたと考える。

(6) 今年度の成果および次年度への課題

意見交換会へ参加しての感想は、「有意義であった：

87%」「まあまあであった:13%」「不満・改善を要す:0%」ということで開催内容について大きな問題は無く、意見交換会の目的である「機電技術者の交流・育成に資する場づくり」を達成したと考える。

各人の感想も「有意義であった」「刺激を受けた」等の意見が多数であり、特にシャッフルについては、「同年代の機電技術者の意見が聞けた」「違う職種の機電技術者と交流でき刺激を受けた」等の高評価の意見が多く、今後も継続していくべきと考える。

昨年度から講演は成果発表の後に行っているが、アンケートからも発表、講演の順序に関して意見はなく、継続していくべきと考える。

「業務への取組意識が変化したか」という問いに対して、「大いに変化した」という回答は29%と、あまり高くない数値であった。昨年度も40%であったことから、内容の見直しを検討する必要があるが、大きく変革することは難しく、小規模な変化を取り入れて参加者の反応を見ていくことも必要と思われる。

討議テーマについては、「テーマが広い方が色々な意見が出やすい」という意見と「漠然としていて内容を絞りにくい」という意見があり、二分化の状態である。特に今年度はAIというまだ馴染みの薄い内容であったことから、参加者が成果をまとめる作業に苦慮していたようにも見受けられた。テーマの検討に加え、複数テーマの設定等も考慮していきたい。

発表方法についてはパワーポイントの使用を継続して行ったが、大きな問題とはなっていない。パワーポイント方式による発表を継続していきたい。USBメ

モリーや延長ケーブル等の備品についても主催者側がどこまで準備すべきかについて検討が必要である。

参加者に関しては、今年度は土木系、道路系、海洋系とバランスよく参加できていたと感じる。引き続き参加案内を極力前倒しして各社の人選に寄与したい。

開催曜日に関しては施設予約の関係から今年は「月・火」開催としたが、週末を望む声が多いことから、出来れば週末開催となるように施設予約時に調整したいが、予約する施設数が多いことから難しい面もある。

講演に関しては、内容についての不満は聞かれず、また、1時間弱の時間配分についても適当であったという意見が多かった。ただ、2講演を望む方も50%いることから、時間配分を検討していきたい。

新聞掲載については、昨年同様、業界紙3社に取材依頼をし、2社に掲載していただいた。今後も取材依頼は継続するとともに、「記事にしやすい内容、方策」を検討し、協会の活動をアピールして行きたい。

3. おわりに

機電技術者交流企画WGでは3ヶ年毎に計画の達成度を確認するとともに活動内容の評価を行い、継続性を協議することとなっている。毎年見直しを実施し、活動総括を行うが、機電技術者意見交換会については、『人づくり』『場づくり』に寄与していることは明らかであり、是非とも今後も継続させていきたい。

(文責 機電技術者交流企画WG)

J C M A